

こんな子いるかな

なぜ今、LDなのか

みなさんは、「LD」又は「学習障害」という言葉を聞かれたことはあるでしょうか。LD (Learning Disabilities) という教育用語は、アメリカの教育心理学者であるカーク (Kirk, 1963) が提唱したと言われています。

クラスの中に知的に遅れているわけではないのに、次のような子どもはいませんか。

集団の中では先生の話
聞き取れず、理解する
ことができない。
(→ 10ページ)



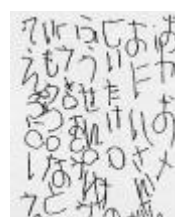
人が聞いて分かるように
話をすることができない。
(→ 11ページ)



たどたどしい読み方を
したり、行をとばして
読んだりする。
(→ 14ページ)



バランスが悪くて、
ほとんど読めない
文字を書く。
(→ 16ページ)



筆算の桁をずらして
計算する。
(→ 17ページ)

$$\begin{array}{r} 840 \\ + 52 \\ \hline 1360 \end{array}$$

計算はできるのに、
文章題が解けない。
(→ 18ページ)



友達の感情や気持ち
を考えずに、自分の
ペースで行動する。
(→ 19ページ)



身体の動きがぎこちない。
(→ 20ページ)



最近、このような特徴をもつ子どもたちを「LD児」又は「学習障害児」と呼んで、テレビや新聞でも大きく取りあげられています。

しかし、このような特徴をもっているからといって、すぐにLDと判断することはできません。子どもがLDかどうかの判断は非常に難しいので、自分勝手に決めつけず、学識経験者などの専門家に判断をゆだねましょう。

LDとは

LDとは、どういう状態を指すのでしょうか。具体的にみてみましょう。我が国では、平成11年7月に発表された「学習障害児に対する指導について（報告）」で、次のように定義しています。

学習障害とは、基本的には全般的な知的発達に遅れはないが、聞く、話す、読む、書く、計算する又は推論する能力のうち特定のものの習得と使用に著しい困難を示す様々な状態を指すものである。

学習障害は、その原因として、**中枢神経**¹系に何らかの機能障害があると推定されるが、視覚障害、聴覚障害、知的障害、情緒障害などの障害や、環境的な要因が直接の原因となるものではない。

1 中枢神経...脳（大脳、小脳、脳幹）と脊髄の総称で、知覚、運動、視・聴覚、言語などの中枢がある。

つまり、LDとは、
知的障害ではない。
聞く、話す、読む、書く、
計算する、推論する能力の
中で、一つ又は複数に著しい
学習上の困難がある。



本人の責任や家庭的な問題ではなく、脳のある部分に
何らかの微細な機能障害があると推定されている。

学習上の困難さは、視覚、聴覚、情緒、身体などの障
害が原因で生じているのではない。

ということです。

LD児によくみられる 困難性について

LDの主な特徴は「聞く、話す、読む、書く、計算する、推論する能力」に、著しい学習上の困難さがあることです。

LDの定義には含まれていませんが、多くのLD児には、付随的に「社会性」や「運動」においても、次に示すような困難さがみられます。これらは、本人がなまけているのでも、親の育て方が悪いのでもありません。

社会性の困難さ（⇒19ページ）

LD児の中には、学校生活や社会生活の中で、自分と周りの人や状況などの関係を適切にとらえることが苦手な子どもがいます。そのため、社会での規則や慣習が十分身に付かなかったり、相手の気持ちが理解できずに、友達との関係がうまくいかなかったりします。

人と人が適切な関係でかかわるのに必要な技能をソーシャルスキル（Social skill）と言います。LD児が示す社会性の困難さは、ソーシャルスキルの弱さと言えます。

基本的なソーシャルスキル	その他のソーシャルスキル
<ul style="list-style-type: none">・ 人の話を聞く・ 会話をはじめめる・ 質問をする・ 自己紹介をする・ 助けを求める・ ものを頼む・ 断る・ 礼を言う・ 謝る	<ul style="list-style-type: none">・ 許可を求める・ 集団に参加する・ 集団の中で発言する・ 友達を助ける・ 相手の感情を理解する・ 相手の気持ちに共感する・ 自分の行動をコントロールする・ 計画を立てる・ 決定する

運動の困難さ（⇒20ページ）

LD児の中には、全身を使った運動がどこかぎこちない、手先を使うことや身体の動かし方が苦手な子どもがいます。

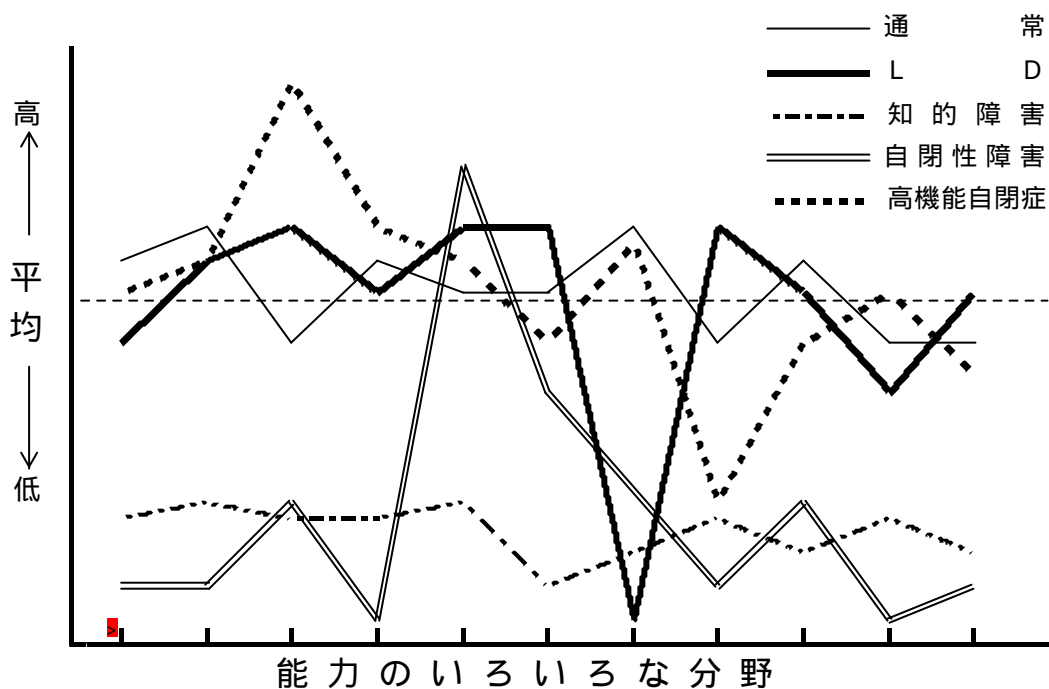
原因としては、姿勢を維持するのに必要な筋肉の緊張やバランスが保てない、手足などの動きが分離・統合できずスムーズな動作ができにくいなどが考えられます。

L D と間違えやすい

L D は、知的障害、自閉性障害、高機能自閉症（アスペルガー障害を含む）、ADHD（注意欠陥/多動性障害）、学業不振（アンダーアチーバー）とよく間違われます。

次に、それぞれの障害などの主な特徴をあげて、L D と比較してみましょう。

知的発達に関するモデル図



（参考・一部引用 尾崎洋一郎他「学習障害（L D）及びその周辺の子どもたち」同成社）

通常

モデル図に示したように、多少のばらつきはありますが、それぞれの能力が年齢相当に、平均的に発達している状態です。

L D

モデル図に示したように、また先の定義（3 ページ）にもあるように、全般的な知的発達には遅れはないが、ある一部の能力（例えば、聞く、話すなど）が、平均（通常）よりも大きく落ち込んでいる状態です。

障害などについて

知的障害

モデル図に示したように、ほとんどすべての能力が平均（通常）よりも大きく遅れている状態です。知的機能が明らかに平均以下（IQがおよそ70以下）で、同時に、適応機能（例えば、身辺処理、意思伝達、対人的技能など）が遅れている状態と定義されています。

自閉性障害

モデル図に示したように、多くの能力は平均（通常）よりも遅れています。特定の能力（例えば、数字や漢字の記憶など）がすぐれている状態です。主な特徴として、対人的相互作用の障害、意思伝達に用いる言語の障害、及び限定された興味と**常同行動**²があります。

2 常同行動...手や身体の一部を繰り返し動かすこと。

高機能自閉症（アスペルガー障害を含む）

知的面や言葉の表出面で遅れないこと以外は、自閉性障害とよく似た行動を示します。自閉性障害にみられる行動特徴が弱い場合は、LDと間違われることがあり、また、自閉症状が改善されるとLDに移行する割合が高いと言われています。

A D H D（注意欠陥/多動性障害）

A D H Dは、Attention-Deficit/Hyperactivity Disorderの略で、主な特徴は、不注意（注意・集中の困難）、多動性、衝動性です。

LDの定義には含まれていませんが、LD児の半数前後はA D H Dと同様な行動がみられると言われています。

学業不振（アンダーアチーバー、Under Achiever）

学業不振児は単に勉強ができない子ども、学業成績が低い子どもではありません。アンダーアチーバーは、学習の可能性としての知的能力と比べて学力（学業成績）が落ち込んでいる子どものことです。

学業不振の原因には、教科の内容、教授法、教師との関係、基礎学力の不足、学習習慣や学習意欲の低下、性格、親子関係、友人関係などが考えられます。LDのように中枢神経系の機能障害は推定されていません。

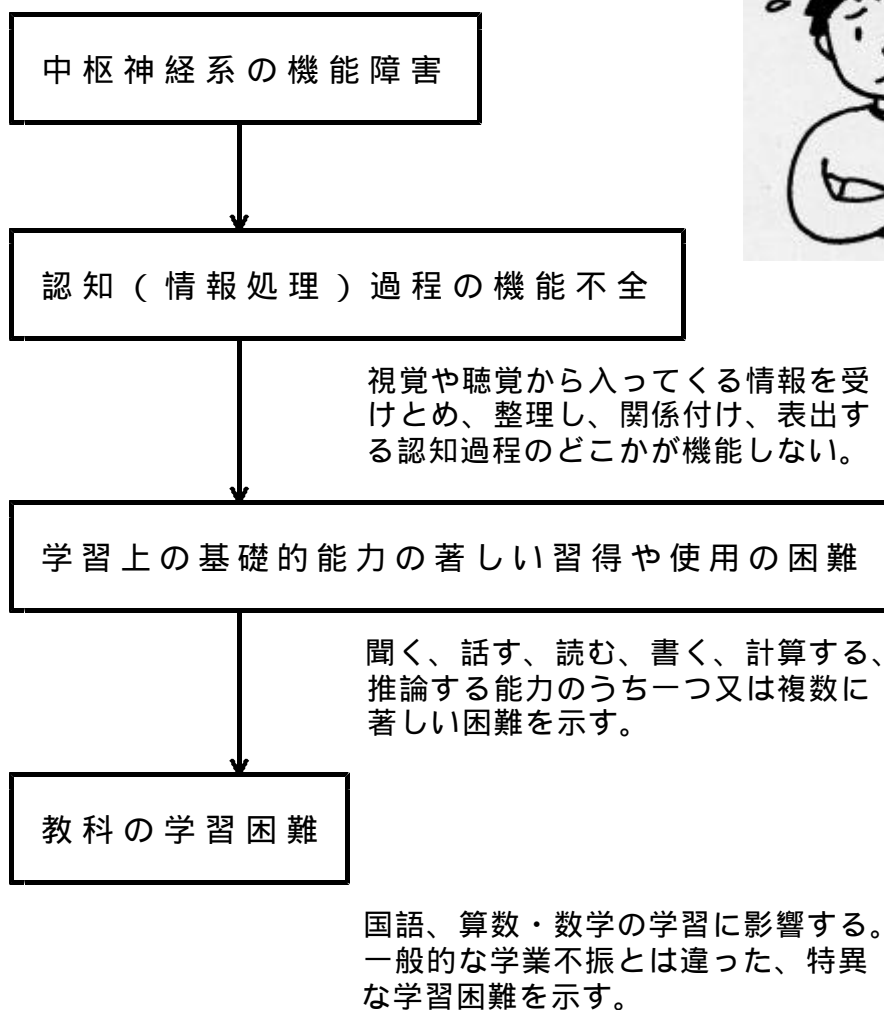
なぜLDが生じるのか

現在のところLDが生じる原因については十分明らかになっていないとは言えませんが、脳のある部分に何らかの微細な機能障害があると推定されています。つまり、視覚や聴覚から入ってくる情報を受けとめ、整理し、関係付け、表出する認知³（情報処理）過程のどこかが機能しない（機能不全）ために生じるということです。

「LDは認知の障害である」と言われますが、入ってくる情報の処理すなわち**認知過程に困難さがみられる**からです。

3 認知...様々な環境やそれらの変化について、気付いたり知ったりすること。

LDが生じるメカニズム



（参考・一部引用 日本LD学会編 わかるLDシリーズ 「LDとは何か」日本文化科学社）

LD児はどのように 指導すればよいか

LD児の指導については、全般的にこれまで障害児教育において実践されてきた指導法が参考になります。

例えば、

- ・ 指示内容は、分かりやすく短くする。
- ・ 身近にある具体物や具体的な内容で教える。
- ・ 繰り返し何回も教える。
- ・ やさしい内容から少しずつ、難しい内容にしていく。
- ・ 子どものレベルに合わせた個別指導をする。

などがあります。

しかし、こういった工夫だけではうまくいかないことも多くみられます。

LD児の指導においては、一人一人の状態や実態をとらえて、本人の得意な能力を生かした内容や方法を考えることが大切です。



次のページから、具体的に述べてみましょう。

(1) 「聞く」ことのつまずき

子どもたちはクラスの中が多少ざわざわしていても、先生の言うことを聞き取ることができます。しかし、「聞いて理解する」ことに困難さがあるLD児の場合、いろいろな音が同じ大きさの雑音となり、先生の言うことがうまく聞き取れません。

そのため、

- 似た音や言葉を聞き間違える。(例 かた はた バット マット)
- 勘違いのような行動がみられる。

など、聞き取りや聞き分けができないために、間違った行動がみられます。

また、いろいろな音が同じように聞こえてくるので、どの音にも反応してしまい、

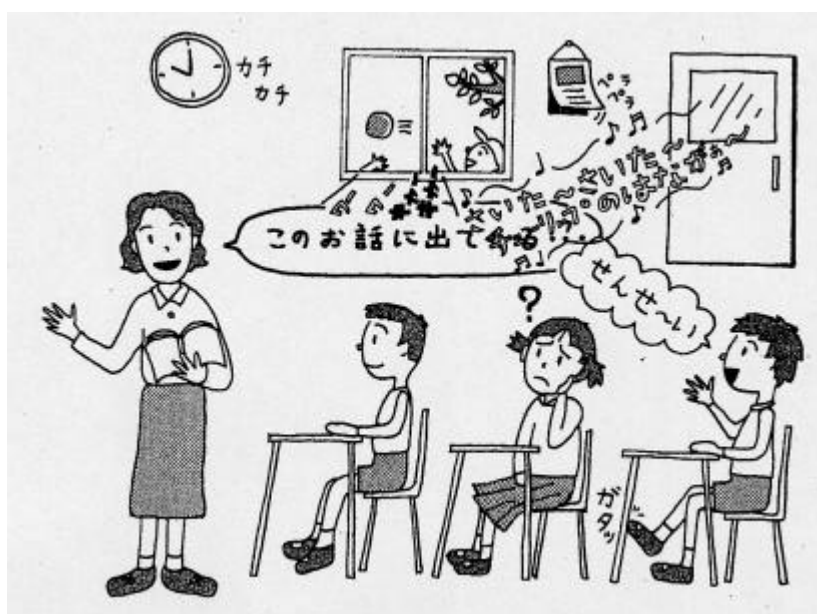
- 先生の話に集中できない。
- よそ見をしてしまう。

などの様子もみられます。

これらはすべて、聴力の障害ではなく、**聴覚認知**⁴の困難さから生じるつまずきなのです。

4 聴覚認知...耳で聞いた音を音色や声の質などでとらえて、判断したり識別したり意味付けしたりすること。

聴覚認知における混乱



次に、「集団の中では先生の話聞き取れず、理解することができない」子どもに対する支援のポイントをあげてみましょう。

教室の中では、先生の声が聞こえやすい前方の場所で、外からの雑音が入りにくい席に座らせましょう。

指示は短く、具体的に、はっきりと一つずつ伝えましょう。

絵や写真、プリント、板書、カードなど、視覚に訴えましょう。

全員に話をした後、もう一度、その子どものそばで話したり、大切な言葉はメモして渡したりしましょう。

分からないときは、「先生、書いて。」と要求できるようなクラスの雰囲気をつくりましょう。



(2) 「話す」ことのつまずき

記憶したり内容をまとめたりすることが苦手なLD児の場合、

- 話しはじめるのに時間がかかる。
- 話していくと、どんどん話題がそれてしまう。

などの様子がみられます。

次に、「人が聞いて分かるように話をするができない」子どもに対する支援のポイントをあげてみましょう。

まず、言葉をすぐに思い出させるには、

子どもの話している内容をしっかり聞きましょう。

写真や絵カードなどの視覚的な提示をしましょう。

はじめの音を言いましょう。

〔例〕 『う』ではじまる耳の長い動物は何かな？」など
と言って、思い出させましょう。

その言葉と関連するものの手がかりを与えましょう。

〔例〕 『ほうき』という言葉が思い出せないときは、掃く動作で示したり、『包丁』という言葉が思い出せないときは、「料理のときに使うもので、にんじんなどを切るもの。」などと言ったりしましょう。

そして、思い出した言葉を順序立てて構成させるには、

実物や動作、写真、絵、文字などと、言葉を結び付けて話をさせましょう。

話しはじめや途中でつまつたときは、手がかりを与えましょう。

「はじめに」「つぎに」「さいごに」などの話し方のパターンを練習させましょう。

子どもの話した内容について不十分なところは、問いかけて、適切な言葉を付け加えましょう。



話す順番をカードに書いて、話をさせましょう。

話しはじめに、「～について話をします。」と話題を言わせましょう。

